

パーソンホッフ・ミッション

濱野 一郎

1992年度研究休暇中、8月より11月まで資料集めの目的でイギリスのパーミンガム大学を訪れました。研究目的は、現在イギリスで進行中の「コミュニティ・ケア」改革……日本でも福祉における中心的な課題となっていることからですが、老人や障害者や子どもの福祉を中心に、在宅福祉サービスを、とりわけ地方自治体を中心となって今後一層進めていこうとすることに関する改革……の実態を把握することでしたが、ここではキリスト教会に関連した体験を一つ述べさせていただきます。

イギリスに到着する前にわずかな日数でしたが、ドイツのチュー

ピンゲンに、そこに住んでおられる日本人の横井さんという方を、明治学院大学の非常勤講師を努めておられる横山正美先生にご紹介いただいております。横井秀治さんは以前日本で障害者施設の職員をされていて、障害を持っているお子様の親でもあります。ドイツ人の奥様の実家のチュービンゲンに住んで、ドイツの福祉や一般的な事情を満載した

「TÜBINGENから」という個人通信を定期的に発行され、日本をはじめいろいろな国の読者に送るという仕事をされています。こういう事情で当地を訪れる機会を得ましたが、訪れてみて、こんな美しい街があるのかと圧倒されてしまいました。聞けばキリスト教神学では有名なチュービンゲン大学のある大学都市であるということで、専門の方々には著名な都市のようです。

それはともかく、奥様は近くのプロテスタント教会の会員ですが、日頃は「駅のミッション」（バーンホッフ・ミッション）といわれる仕事に就いておられました。比較的大きな鉄道駅に事務所を開いてそこに日々通い、駅を通過するお客の中で、老人や障害者など重い荷物を運べなかったり、気分の悪くなったりでいろいろと難儀をされている人々のために一日奉仕活動をするお仕事です。私が訪れたときも、疲れたお年寄りを介抱しているところでした。

聞いてみますとそれは、奥様所属の（夫の横井さんは別の教会の会員とのことでした）教会から派

遣されているとのことでした。ドイツ全体に広がっている習慣なのか、あるいはヨーロッパでは普通に行われているのか、寡聞にしてまったく知りませんが、私たち日本人から見るとすばらしい試みのように思われます。決して目立つ行為ではありませんが、驚くべき自然さで、さりげなく、日常的営みとして他者への援助活動がミッションとして行われているそういう文化的営みを実感させられた一駒でした。駅という舞台、そこにヨーロッパをはじめ全世界の人々がいきかう、そういう背景のなかでの一種の旅行センチメンタリズムのせいだけだとはいいきれないような思いをしています。

（はまの いちろう

所員、社会学部教授）

